

草の芽句会だより

NO,111,
17,11,2

小庇に通りすがりの豆名月

文子

舛形にテント巡らし菊花展

城歩く小春日和を賜わりし

貞

書き写す啄木詩歌集秋深む

後の月仰ぎ見る身のしんしんと

節子

干し柿にせよと渋柿どっさり

青き空吸い込まれゆく冬桜

純子

ちらほらと高きに残る冬桜

空映し落葉の浮かぶ城の濠

貞子

城濠のバスの連らなり天高し

行く人に八十路の兄の菊作り

範子

秋耕の杖つく兄に助けられ

裏側にまわれれば寂し菊花展

禮子

秋の空パラポラアンテナそそり立つ

お天主の修復作業天高し

剋子

草むらに目立たず咲いて赤のまま

出席者 大黒 真鍋 氏家 森 川原 吉崎

馬場 小山

手

天高し！ 天主閣の空は青く輝いて一片の雲もない。大
門広場では恒例の菊花展が開かれて

あたりにはいい香りが。観光客が多いせいかな城山が華やいでいる。見返り坂で何度も息を整え
ながら天主閣を目指す。二の丸跡にはもう冬桜が。空に溶け込みそうに咲いて・・・といつか貞
さんが作った句を思い出した。気付かずに通り過ぎる人もあるほど小さくて可憐な花。長く咲い
て今年も私たちを楽しませて欲しい。天主閣広場で幼稚園児の一団と出会う。赤や黄色の帽子が
賑やかに駆け廻り、先生が声を張り上げている。「昔も今も子供は言うこと聞かんなあ」「そっち
へ行ったらあぶないよ」思わず先生のお手伝いをしてしまう。桜紅葉はもう散り始めていた。石
垣の裾には落葉が重なり、踏むと大きな音がする。団栗が転がっている。秋は駆け足で過ぎてい
くみたい。来月はもう師走、納句会である。

